

イスラエル - パレスチナ戦争の背景にある歴史的・政治神学的問題について

稻垣久和

1. はじめに

イスラエルとハマスの停戦をめぐっては、1月9日から6週間を第一段階として、ハマス側が人質33人を解放することで合意している。第二段階では全ての人質の解放と引き換えに、恒久的な停戦が期待されている。ただ、イスラエル政府内には第一段階の終了後に戦闘の再開を求める強硬な意見があり、交渉は難航することが懸念されている。そこに2月4日、トランプ米大統領の突然のガザ住民の「集団移住計画」の提案が出た。世界からの批判が噴出した中で、国連事務総長グーテレスはこれに「民族浄化」の国際法違反を挙げている。この批判はパレスチナ問題の歴史から出てくる本質に関わっている。

ハマスは2023年10月7日に、突然、イスラエルに過激な“テロ”を仕掛け民間人の殺戮と多くの人質を取った。それ以来、「報復」としてイスラエルはガザへの空爆と何十倍もの無差別な非人道的攻撃を続けていた。この事態に対する激しい批判が、国連をはじめ国際社会にかつてないほど高まっていた。ところがヨーロッパ、そして米国も、西洋社会はいわば過去のユダヤ人問題等のトラウマもあってか、批判的論調に腰が引けてしまっている。今日のパレスチナ問題つまりユダヤ教、イスラーム教、キリスト教が乱立するこの“聖地”と称される地域の根深い問題に、西洋キリスト教は十分に政治神学的対応ができていない。

パレスチナ生まれのキリスト教神学者のアルコーリはこういった状況を踏まえつつ、彼ら自身の反植民地的な神学、特にパレスチナからの非暴力の解放の神学といったものの模索を試みて、昨年11月にある論文を著した。今後には必ず必要なことは、西洋のキリスト教会指導者たちが、アルコーリのような学問的にもしっかりした言説に冷静に耳を傾け、応答するということであろう。国連や国際社会よりも、米国政治に追随する日本政府に至っては、事態の複雑さをまったく理解していない。そこで著者の許可を得て、当該論文の大筋の紹介と、細かい注釈を省いた解説を試みたい。根深い宗教的確執の一端への理解に資することを願っている。

ヨセフ・アルコーリ (Yousef Alkhouri: ベツレヘム聖書大学准教授、Th.D(アムステルダム自由大学)) はガザで生まれたキリスト教徒である。彼の「どの福音か? ガザでのイスラエルのジェノサイドにおける聖典の武器化」(2024年) という論文に沿って紹介する。ことの複雑さの解明に大いに役に立つ。

これまででも、ユダヤ教のごく一部の説くシオニズムという思想が、やがてパレスチナに入植地をつくっていったことはよく知られていた。この一派は世界に散ったユダヤ人たちのほんの一握りであり、宗教的というよりもむしろ世俗的・民族主義的グループであった。多くの正統的ユダヤ教徒はこれに批判的である（例えばY・ラブキン『イスラエルとパレスチナ』岩波ブックレットなど参照）。そしてこのシオニズムがこの100年ほどの間に深化し、今日、定住化していくための中心イデオロギーとして利用されている。シオニズムという名

のイデオロギー成立には、実は西洋キリスト教徒も大いに加担した。

パレスチナを占有し、もとからいるパレスチナ人住民を排除することがすでにジェノサイドの域にまで達していた。これと並行して聖書諸書の武器化が進んでいる。AI システムを“福音”（=良きおとずれ）と呼ぶに至っては、まさに“福音”は本来のものとは根本的に異なる意味で使用されているのだ。帝国主義的ないしは植民地主義的に変質した福音は、イエスの新約聖書での神の国（神の王国）の福音を、まさにこの地の征服に利用した。パレスチナ人抑圧にも同じ論理が適用された。

問題はシオニズムだけでなく、キリスト教原理主義者たちのイスラエル国家への支援にある。米国の福音派の多くというよりも一部分が確かにそうだ。キリスト者のロビーイストのグループでイスラエルのためのキリスト者連盟（CUFI）や、また米国の何名かの政治家たちがいる。またティム・ウォルバーグは議員でかつムーディー聖書学院とホイートン大学卒の牧師であり、「ナガサキ、ヒロシマのように」ガザに爆弾を落とすべきなどと、とんでもない発言をした。たとえジェノサイド的戦闘であっても、なおイスラエルを支援し、それを「聖書の教え」などと言うマイク・ジョンソンは米国の連邦下院議員だ。

イスラエル支援の牧師たちの中には、ジェノサイドを聖書の預言と默示録的終末論の視点から解釈している人たちがいる。彼らにとってガザでの何万ものパレスチナ人が殺されているのは避けられない出来事であり、キリスト再臨の際の先導となる祭壇上での犠牲だと、とてつもない解釈をしている。

これらの諸例はイスラエル政府への無条件の支援を示していて、そのジェノサイド的イデオロギーと機械的見方は、まさに問題だらけの聖書解釈と神学によって為されている。米国でキリスト教福音派によって支持されるトランプ政権が成立した時でもあり、事柄の本質を冷静に学問的に検討する必要がある。

2. 聖書の武器化：ジェノサイドのソフトウェア

ヨーロッパの帝国主義の時代の植民地主義とシオニズムは、その統治と植民地の現地の人々の搾取を正当化するために、聖書テキスト類を道具化してきた歴史がある。ポストコロニアルの批評家たちは、聖書は征服のための書物であったという議論をすら展開している。パレスチナの神学者でルター派牧師のミトリ・ラヘブは、シオニストの移民計画を正当化するシオニストのキリスト教神学と聖書テキストの使用はまさに「ソフトウェア」であると言っている。つまりパレスチナ移住のための軍事力である「ハードウェア」のもとになっているものだ、と。シオニストとそれを支援するキリスト教徒たちは、ユダヤ教とキリスト教の聖書をパレスチナへの移住と、それに伴うガザでのジェノサイドへの正当化として解釈するのである。

マイケル・プライオールは「聖書と植民地主義：道徳的批判」の中で、シオニストによるパレスチナへの軍事征服への適用としての“聖書の武器化”を論証している。世俗的なシオニストたちも聖書的な権利、または民族的・宗教的ルーツをパレスチナという土地に対して

主張したからだ。あるシオニストとキリスト者のグループにとって、聖書はこの地域の植民地化に対して正統性を与えた。聖書の中の約束、征服、亡命、帰還という物語は本質的な役割を果たした。創世記 12：1–3, 7, 13：15, 17：8 はよく引用される。19世紀の英国のシャツベリー伯爵(1801–1885) の初期の頃の言明はイザヤ書 6：11 を引用している。

西洋のキリスト教の原–シオニズムが、その後のユダヤ人のシオニズムを形作ったのは明らかである。ユダヤ人のシオニスト運動が出てくるだいぶ前に、ケイス・アレクサンダー(1791–1880) とシャツベリーが、キリストの再臨への前提条件としてユダヤ人たちの「約束の地」への「回復」という想像力を發揮した。ゲルション・シャフィールは次のように言った。

ユダヤ人のメシア願望が具体的なシオニストの計画になるずっと前に、キリスト教の願望があった。それは英國のキリスト教の回復主義の中に現れた。それはキリストの再臨の前提として大量のユダヤ人たちがパレスチナに移住することを要求し支援する運動であり、その時に至り、彼らはキリスト教徒に改宗するというものだ。

パレスチナの歴史家のヌア・マサルハ(1957–)はシオニストの運動は、ヨーロッパのナショナリズムと植民地への移住の延長上にあると論証している。それはキリスト教の側に聖書の道具化、聖書考古学と神学を導入してシオニスト移民の運動を正当化してしまった、と。マサルハによればシオニズムは「多くのヘブル語聖書の物語、特に戦争による征服の伝統を収集して、パレスチナへのシオニト戦闘移民の諸テーマを構成した」。ヘブル語聖書（旧約聖書）に記述のある 3000 年前にもさかのぼろうという、あのカナンの征服とペリシテ人の一掃、ヘブル人の宿敵であったカナン人やアマレク人との戦いといった物語は、シオニストたちとシオニスト的なキリスト者たちにとって、今日のパレスチナ人の根絶とその土地の植民地化が神学的に正当化されるように利用された！ こういった実践が、何とまさに神の命令である、ということにされてしまうわけだ。

シオニスト的なキリスト者たちにとって、ガザのパレスチナ人たちへのジェノサイドは独特な方法で黙示録的になっている。シオニストの移民計画をめぐる主な出来事は、聖書の故事に戻って 20 世紀、21 世紀的に適用されている。最近の一例としてはオランダの名誉領事のロジャー・ファン・オオルドのイスラエル国家への言及がある。オオルドは「イスラエルのためのキリスト教」の 1992 年から 2020 年までのオランダ委員長であった。彼にとってはハマスという名称はカオスと暴力を意味する。創世記 6 章の読解に基づき、「その当時、主は地上に人間を創造したことを悔やんだ、そこは暴力に、そしてハマスに満ちたからである」。それはどうしようもないこじつけである。オオルドがきちんと理解していないのは、ハマスというのは以下の頭文字にすぎない。Harakat al-Muqawama al-Islamiya, すなわちイスラーム抵抗運動 (Islamic Resistant Movement) の略である。また彼以外の人々も、現在の出来事を彼ら自身の勝手な聖書解釈に結びつけている。聖書のアマレク物語を独特

の終末論に結び付けたり、AI 軍事システムを“福音”の名で読んだりしていることがまかり通る。

ガザへの戦争宣言の中で、現在のイスラエル首相のベンヤミン・ネタニヤフはサムエル記第一 15：3 のサウル王への神の命令を引用した。「さあ、行ってアマレクを討ち、アマレクに属するものはすべて滅ぼし尽くしなさい。容赦してはならない。男も女も、子どもも乳飲み子も、牛も羊も、ラクダもろばも打ち殺しなさい」。この物語の場面は古代のヘブル人とアマレク人との間の戦闘である。最初の古代イスラエル王が預言者サムエルを通して神から受けた命令であった。それはアマレクを討って破壊することである。このテキストにおいて、現代パレスチナ人はアマレクと見なされている。ネタニヤフはこのような軍事的使命に、神に立てられた古代サウル王の役割を果たしているというわけだ。

このようなサムエル記第一 15 章への言及は、最近になってなされるようになったわけではない。ユダヤ教とキリスト教的シオニストたちの、古代のカナン人やペリシテ人やアマレク人への敵意を示した箇所への引用は、これまで繰り返されてきた。ジェフリー・ゴールドバーガーは 2004 年 5 月「ニューヨーカー」への寄稿において、ヨルダン川西岸のシオニストのヘブロン定住者たちへの調査を載せている。彼は定住の指導者たちへのインタビューを紹介しそこでもやはり聖書からの引用によって町づくりを合理化している。アマレク物語に関してゴールドバーガーは「ある定住指導者たちはパレスチナ人たちを現代に受肉したアマレク人たちと見ている」と。移住者委員会委員長のベンツイ・リーベルマン(1959-)とのインタビューの中で、確かにリーベルマンは「パレスチナ人はアマレクである！」と明言している。

マサルハは「アシュケナジの主だったラビたちや靈的指導者たちは、ヘブル語聖書の物語を現代のパレスチナに住むイスラーム教徒、キリスト教徒を昔のカナン人、ペリシテ人、アマレク人、イシマエル人に見立てて、『神の計画』によって根絶されるか追放されるかという運命にある」と。同様にエルサレム国際キリスト教大使館や福音連盟は似たような文書を出していて、イスラーム教徒、アラビア人、パレスチナ人をアマレク人と呼んでいる。一例はキリスト教大使館の副委員長のデイヴィッド・パーソンズで、彼は 2023 年 10 月 7 日の事件を永遠の宗教戦争の一部分で、アベルに対するカインの妬み、イシマエルとイサク、エソウとヤコブ、そして今日のアラブ人イスラーム教徒とイスラエル国家のユダヤ人にまで及んでいると解釈している。

3. 10 月 7 日テロ直後の反応

10 月 7 日の事件と、ガザの状況へのシオニスト的キリスト教徒の反応はきわめて多様である。その多様性は、特に米国で原理主義者、字義的解釈者、リベラル派と広く分かれている。それでも一致点らしいものが見えるのは、イスラエルのシオニストの「自衛」という表現である。多くの字義的解釈者はシオニストの移民の事実を神の奇跡として歴史的に見た上で、多くの出来事を彼らの視点からの聖書の預言と解釈している。そのような聖書の預言

へのアプローチは、イスラエルのためのキリスト教連合のような機構を成立させている。その働きは重要な政治的役割を負い、神学的な確信からイスラエル政府を支持しているのである。

もう一つの例はグレッグ・ロック(1976-)の働きであろう。ロックは米国テネシー州の福音派のグローバル・ヴィジョン聖書教会の牧師である。10月8日の説教は後ろにイスラエル国旗を掲げてイスラエル政府がガザを破壊するように要求し、岩のドームを吹き飛ばして第三神殿を建造するように、と。このような行動が、終末の印として、キリストの再臨と神の国の到来を早めるのだ、と。同様なものは福音派のメガチャーチ牧師グレッグ・ローリー(1952-)のYouTubeビデオで、約150万人が視聴している。その中でローリーは「エルサレムは終末時の出来事の焦点である」と述べる。ハマスの攻撃はゼカリア書2章とエゼキエル書37章、48章の読解を通して解釈されている。ロックやローリーは米国キリスト教の指導者たちのほんの一例に過ぎず、10月7日の出来事直後の、はっきりした言動であった。彼らの立場は他のキリスト教グループや指導者たちが、双方の暴力行為の停止と停戦を呼びかけているところから見て、あまりに信じられない遠いところにある。

第三の例は“福音”という言葉をAI軍事システムに使用することについてである。国連専門委の報告書によれば、イスラエル軍隊は「福音」、「ラベンダー」、「お父さんはどこ?」という三つのAIシステムを「市民」「インフラ設備」「住宅建物」への攻撃使用としている。パレスチナ人とイスラエル人ジャーナリストによって運営されている+972というオンライン雑誌がガザにおけるこの語のシオニストの使用について報告した、そのシステムはヘブル語で「ハブソラ」と名付けられ英語で「福音」と翻訳された。前のイスラエル情報局高官はそのシステムを「大量暗殺工場」と表現した。

イスラエル軍隊の以前の長官アヴィヴ・コチャヴィが、福音システムの情報・軍事能力を「かつてはガザで年間に50の標的だったが、今ではこの機械は一日に100の標的を狙える。たとえそのうちの50%が攻撃されても」という段階にまで引き上げた。オックスフォード大学のジェニファー・カシディは、戦争機械のアルゴリズムへのイスラエル軍隊の信頼のほどを語る。信頼の一つとして、“福音”という言葉を自然に使うのだ、と説明している。

世界の多くのキリスト教徒たちはシオニズムや原理主義者たちに加担しないだろう。しかし確かにシオニズムという運動は、宗教的伝統と聖書諸書をシオニスト移民の支援への正当化のために使用しているのである。クリスチャニティ・トゥディ編集長のラッセル・ムーアは1948年以後の入植計画を聖書預言の成就とは信じていない。それでも「アメリカ人キリスト教徒は今日にイスラエル支援の見えない攻撃に結び付けられている」とその傾向性を語っている。

4. どの福音か？

破壊的なAI軍事システムと機械という意味で「福音」という言葉を使うのは、特に世界のキリスト教徒にとって関心事とならざるを得ない。多くのパレスチナ人にとって、「良い

知らせ」の聖なるテキストとしての「福音」、その唯一の意味が、死と破壊をもたらす軍事的な武器と混同されていることはまことに耐えがたいことであろう。その場合、「福音」は帝国主義的に植民地化する力の代名詞であって、イエスの説いた「神の国」の代名詞ではない。今日の疑問はこういうことだ。この言葉を聞いた時にどちらの「福音」をパレスチナ人が想起するのか。イエスの神の国なのかそれともジェノサイドなのか。

「福音」*evangelion*（エヴァンゲリオン）という概念はいくつかの意味を持つ。福音書すなわち新約聖書の最初の四つの本というだけではなく、解放と人間および被造物への救済をもたらす神の介入、という「良い知らせ」という意味もある。マルコによる福音書はまさに「良い知らせ」の中心である。神の国はイエスの中心的メッセージと、彼の福音そのものを示している。かつて、G・S・ビーズレームレイ（1916–2000）は新約聖書の研究者の間で一つのはっきりした合意があると言った。それはイエスの神の国と彼のミニストリーに関する教えこそが、まさにイエスの信頼と中心にある、ということだ。

イエスへの福音の証言の領域について、ほとんどすべての新約聖書の研究者の一致があるとすれば、それはイエスの神の国についての教えである。それは福音諸書に記録されたイエスの全体の宣言にまで浸透しているし、彼のミニストリー全体を決定したように思われる。

ビーズレームレイにとって、神の国の宣言は「イエスのミニストリーの序章のクライマックス」である。マルコにとっては「良い知らせ」（マルコ福音書1：1）とは、すなわちイエスの神の国が近いことの宣言にほかならないし（1：1、14–15）、したがってイエスの福音とは「愛と平和の神の国」の福音である。それは当時のユダヤ人が被っていたローマ帝国支配と抑圧からの回復と解放への熱望の成就であり、イザヤ書52：7, 61, 62に言われていたことであった。それは暴力的抵抗によってなされるのではなく「愛と平和」によってなされる。ジョージ・エルドン・ラッド（1911–1982）は語っている。

イエスは神の国の到来を宣言した。彼はヘブライユダヤの思想の背景に対峙して、人々が罪、悪、死の支配する状況の中で生きてはいても、そこから救済される必要がある、と語った。彼の神の国の宣言は、希望と旧約預言者たちの真意に戻ったところ、すなわち来るべき新時代への期待にある。そこには今の時代の悪のすべてが神の行為によって人間と地上の存在から追放される、と。

「福音書の中心メッセージとしての神の国を解釈する」、このことは緊張をはらんでいる。特に今日のパレスチナの文脈ではそうだ。かつて、アルベルト・シュヴァイツァーのような聖書学者は神の国を将来の默示的出来事として解釈した。人道的平和主義者でありノーベル平和賞受賞者のシュヴァイツァーは、移住計画について触れなかつたし支援もしなかつ

た。にもかかわらず彼らの神の国の将来的な見方が、シオニスト的なキリスト教徒のイデオロギーとして影響したのではないか。ヤーコフ・アリエルは次のように言う。「聖書の字義的な読解とメシア的な信仰に固執して、一部の福音派のキリスト者は、今日のユダヤ人を聖書的イスラエルの相続人であり、メシアの時代のダビデ王国の回復についての預言の対象として見なしている」。

この種の聖書解釈を普通のキリスト教徒が取ることはあり得ない。しかしこのような解釈がシオニスト入植者の「ソフトウェア」となってしまったのである。その福音解釈は破壊的でありかつ帝国主義的暴力と支配だ、という批判を受けてすらもなおそう解釈する。こういう風潮に対して、最近の聖書学研究の成果からもさらなる批判が加えられる。

今日のジョン・バークレイ、ラウラ・ロビンソンそしてシェイン・ウッドのような研究者たちは、ローマ帝国は新約聖書記者たちの中である役割を果たしていたと語っている。例えばバークレイは、使徒パウロは決して政治的な現実と無関係に語った人物ではなかったとしている。「パウロの福音は深く反定立的で対決面がある、すなわち彼は二つのまったく異なる反定立的な王国を知っていた」。似たような表現でグラハム・スタントンも次のように語る。

皇帝崇拜など帝国内の宗教が、必ずしも初代キリスト教徒がその言葉（福音）を使用する原因となったわけではないが、それでも背景にはなった。当時、はっきりとキリスト教的な使用法を作り上げる必要があり実際にそうしたからだ。キリスト教徒たちの主張はこうである。キリストにおける「良き知らせ」は神の無類の出来事であって、決して、ローマ皇帝たちについて繰り返される高貴な誕生やら、その民衆への恩恵やら、帝国加盟のための儀式への「良き知らせ」とは比べようのないものだった。

スタントンは、帝国の「福音」と初代キリスト教徒の共同体で使用されていた「福音」のいくつかの意味を区別している。彼は「イエス・キリストの福音の宣言は、ローマの皇帝たちに関する諸『福音』への対抗概念となっていた」と。

§ §

初代キリスト教徒は帝政ローマの下で、激しい迫害に会って残酷に殺されていった歴史がある。その遠因は、まさにこのような現代聖書学研究が明らかにしている事実にあったということであろう。いやそもそも、当時のイエスの十字架刑といったものが、ローマ式の残酷な処刑方法であった。西洋文明に深く食い込んだキリスト教は、もう一度そこから解き放たれ、新約聖書のイエスの説く「愛と平和の福音」に耳を傾けようとしている。

パレスチナ人の今日の苦しみに対し、世界が人道的な観点から支援の声を上げている。日

本は欧米とは異なって、より中立な立場からの支援が可能な世界史的位置にあるはずだ。もしそれをしないというのであれば、“先進国”の政治的駆け引きに組み込まれた我々もまた、暗黙のうちに今日の帝国主義的な闇の「力」の呪縛に囚われている。こういうことなのであるか。